地域に根ざした運動を

生活クラブの創始者である岩根邦雄氏は、かつて、フリーカメラマンとして安保闘争を目の当たりにし、自ら社会変革に関わろうと決断。しかし、生活実感のない政党政治に疑問を感じ、市民の能動的な組織を作りたいと考えるようになる。そこで、妻の志津子氏、河野栄次氏とともに地域の主婦に呼びかけ「牛乳を安く飲もう」という活動を始めた。最初の会員は、原水爆禁止の署名集めなどで顔なじみを増やしていた志津子氏が1軒1軒近所を訪ね歩き集めた。

「二流の牛乳」との中傷とは逆に、当時はビタミン剤を添加するなどの加工乳全盛の時代。この活動は牛乳販売店からさまざまな妨害を受けるが、会員は増え続け、1967年秋ごろには1000人、配達する牛乳は2400本に達した。

生協の設立～おおぜいの私～

「〝1人の私〟にはとてもできないことが〝780人の私〟にならできる」。設立当初のメンバーのことばがある。〝おおぜいの私〟を求めて組合員を募り生協設立が実現。設立準備と同時に運営方法の模索も行

なわれ、採用されたのが「班別予約共同購入制度」だった。班は、消費材を受け取る場であると同時に、組合員が直接参加する議決の単位でもあった。

生産する消費者

1979年に、自前の牛乳工場を建設。1988年には、120℃2秒間殺菌だった製法を72℃15秒間殺菌のパスチャライズド製法に転換した。現在でも牛乳の殺菌温度は120℃や130℃で2～3秒間という「超高温殺菌」が主流であるが、パスチャライズド製法を実現するためには細菌数の少ない高品質な原乳が必要となる。生活クラブの組合員は、搾乳時の細菌を減らすため牛の乳房を拭くタオルを集めて送る「タオル1本運動」を展開した。業界の常識を打破していった「生産する消費者」という言葉は、生活クラブの基本になっていく。しかしながら、配送形態の主流が個別配送になるなかで、組合員の参加のあり方が課題となっていった。